

大決壊

~メイド調教~



§ 1 章目 うれしょん！ P 4



§ 2 章目 ピンクローターで調教！ P 25



§ 3 章目 お尻ペンペンで調教タイム！ P 64



§ 4 章目 お浣腸調教でお散歩デート！ P 85



§ 5 章目 下剤で便秘を調教★ P109



§ 6 章目 三角木馬でお仕置きタイム！ P135



§ 7 章目 排泄管理で我慢調教！ P165



§ 既刊紹介 むふふ P188

§ 2 章目 ピンクローターで調教！

翌朝になって。

今日は水曜日なので、学校がある。

だけど航太はといえば、いつものようにぐーたら家で引きこもりライフを満喫することが日課になっていた。

「それじゃあ、車に気をつけていってくるんだぞ」

「行ってきます、航ちゃん♪」

玄関で登校する悠花を見送っていると、しかしそんな航太にきつい視線が向けられる。

視線の主は――、見なくても分かる。玲だ。

「ご主人様は登校しないのですか？」

「うっ、分かってるだろ……玲。俺はテストのとき以外は登校しない主義なんだ」

「確かにテストで点を取るもの大切なことだと思います。しかし、充実した学園ライフというものは、豊かな人間関係に密接に関係してくるものだと思うのですが？」

「たしかに人間関係も大切だな。しかしいまの俺にはもっと大切なことがあるんだ」

「大切なこと、ですか」

「ああ、大切なことだ」

「それでは無理に、とは言いません。ご主人様のやりたいようにしたら良い思います」

口ではそう言ってくれる玲だけど……しかし、本心では納得していないのだろう。

目つきは厳しいままだった。

ここは早々に退散するに限る。

「二人とも元気に登校してこいよ」

「はい！　いってきます、航ちゃん！」

「行ってきます、ご主人様」

二人を見送ると、航太はさっさと扉を閉めてしまう。

これでこの広々とした屋敷には、しばらくは航太一人きりだ。

「さて、と……。積んでおいてあるゲームを消化せねば」

航太は一息つくと、西側二階にある自分の部屋へと引きこもることにする。

頭の働かない午前中はテレビゲームを進め、午後になったら勉強をすることになっていた。

何事も効率とルーチンが大切なのだ。

……と、言っても、このルーチンを人に押しつけるようなまねは絶対にするつもりはない。

何事も、個性が大切なのだ。

「と、言うことだから気合いを入れてゲームをするからな！」

ゲームのコントローラーを握った航太は、ただひたすらにゲームへと没頭していく――。

☆

「……ハッ!？」

航太が現実世界へと意識を連れ戻されたのは、窓から刺してくる夕日がまぶしく感じられてきたからだった。

手には、未だにゲームのコントローラーが握られていたりする。どうやらゲームに集中するあまり、気がつけば夕方になっていたようだ。

本やゲームソフトがうずたかく積まれている薄暗い私室は、このときだけは美しい夕日に染まっていた。

「やばい、そろそろ二人が帰ってくる時間だな」

そう思っていると、洋館のインターフォンが鳴らされる。

手元に置いてある子機のディスプレイには、学校から直接帰ってきたのだろう。

制服姿の悠花と玲が並んで立っていた。

「入っていいぞ」

洋館の鉄扉が開くボタンを押して、二人を敷地内へと誘導。

噴水のある大きな庭を歩いて洋館にくるまでは、あと五分ほどの時間がかかるはずだ。

「さて、と。どうしたものかな。これから夕飯の時間まで勉強するもよし、それとも悠花たちに仕事を教えるのも大切だよな……」

どうしようかと迷っていると、コンコンッ、部屋のドアがノックされる。

「誰だ？」

「失礼します、ご主人様」

ドアを開いて部屋に入ってきたのは、メイド服に身を包んだ玲だった。

制服姿のときには頭に乗せていなかったひらひらのカチューシャを頭に乗せている。

やはりメイドの魂はカチューシャに宿る――。

そんな訳の分からないことを考えていると、玲が口を開くのだった。

「ご主人様。今夜は、私が夕飯の準備をしたいと思います」

「おお、よろしく頼むぞ。財布は預けておいたよな。好きな出前を取っておいてくれ」

ご飯の準備は大変だからということで、二人のメイドには適当に

出前をローテーションして取っておいてくれということになっていた。これなら楽だろうし。

しかしなぜか玲の表情は険しいものになっていく。

「ご主人様？　あまり外食ばかり食べていると、栄養が偏ってしまいます。それどころか、塩分の過剰摂取になってしまい、将来的に重大な疾病を招く要因になってしまうかと」

「……と、いうと？」

「私が夕飯を作って差し上げます」

「玲は……料理をできるのか？」

「失礼ですね。簡単なものしかできませんが、大体のものは作ることができると思います。なにかリクエストは？」

「それじゃあ……、カレーとか作れるか？」

「お安いご用です。それではご主人様、一緒に出かけましょう」

「は？」

一瞬、なにを言われているのか理解できずに首をかしげてしまう。

そんな航太に、玲は続けるのだった。

「ご主人様はあまり外に出歩かない生活をしているかと思えます。ですから、夕飯の材料は一緒に買いに行きましょう」

「いやいやいや、俺は外になんか出たくないぞ。日光に当たったら灰になってしまう」

「なにドラキュラみたいなことを言ってるのですか。今日はずっとどうやってご主人様を外に連れ出そうかと考えていました。絶対に

ご一緒してもらいますからね」

「いや、ちょっと待て。割とマジで。俺は外になんか出たくないぞっ」

「子供じゃないんだから、ごねないでくださいっ」

玲は無防備なのか、それとも自覚がないのか、身体を密着させると腕を組んでくる。

むにゅ……。

二の腕に感じられる温かく柔らかな感触は、間違いなく少女特有の膨らみ。

恐らく着痩せするタイプなのだろう。

スレンダーな体型だと思っていたけど、思っていた以上に成長しているようだった。

その膨らみに驚いて、つい、

「わかった！ 分かったから離すんだっ」

航太は白旗を揚げてしまっていた。

引きこもり特有の、女性に免疫がない体質なのだから仕方がない。……悠花のうれションは昔から見せられているから慣れているけど。

「ご主人様、なんか身体が熱くなっているようですが。それに顔も赤くなっています」

「からかうんじゃない。む、むっ……。しかし、こうなってしまっ
てはしょうがない。ただし、条件があるぞ」

「条件、ですか？」

「ああ、条件だ。まずは……。そうだな、俺が外に出るからは
……。玲は、そのメイド服を着て一緒に買い物に行くことっ」

どうだ？

これで俺を外に連れだそうだななんて考えは捨ててくれるか？

玲の顔色をうかがっていると、しかし玲は平然と言ったのけるの
だった。

「そんなことお安いご用です。さあ、一緒に買い物に行きましょう」

「ちょっ、そこはドン引きするところだろう!？」

「たしかにほんの少しだけ驚きましたが、気にすることはありません。
女は度胸ですから」

「む、むっ……」

ちなみに未だ玲は腕を組んできているから、身体を密着させたま
まだったりする。

しかも玲はこの状況をどこか楽しんでいるのだろう、唇が、ほん
の少しだけ吊り上がっていた。

いかん。

このままだと本当に買い物に連れ出されることになってしまう。
太陽が出ているあいだは、外に出る主義ではないというのに。

「こ、こうなったら……。っ」

「なんです？ まだ条件があるのですか？」

「うっ、うぐっ。こうなったら……っ」

最後の手段だ。

玲には本気で嫌がられて軽蔑されるかもしれないけど、ここは背に腹は代えられない。

それほど航太は、出不精なのだ。

「もう一つ条件があるぞ。それは……っ」

航太は手近にある机の引き出しから、秘密のアイテムを取り出す。

それは、ピンク色をしていた。

更にいえば、手のひらサイズよりも二回りほど小さい、楕円形をしていた。

いわゆる、ピンクローターというものだ。

「なんですか、それは」

しかしピンローを初めて目にしたのでだろう。

玲は航太の手のひらに乗せられているピンローを、まじまじと見つめている。

「これは弊社のプロトタイプだ。それも俺特製のな」

「と、いうことは……」

たったそれだけで玲は理解できたのだろう。
それが、大人のおもちゃであるということ。

「察しがいいな。そうだぞ。これは無線式のピンクローターだ」

「ピンク、ローター？」

「ああ。しかもこいつは無段階で振動する強度を調整できるから、あたかもパートナーの大事な部分を指で直接愛撫するかのような快楽を与えることができるんだ」

「指で、直接……」

「これを使えば、例え屋外であっても、パートナーを快楽の坩堝へと沈めることができること間違い無しの逸品だぞ」

「それがどれだけいかがわしいものなのかだけは理解できました」
「理解できたって……いいのか？　これを玲の大事な部分……つまりだな、秘部に充ててもらふことになるのだが。もちろん、俺が買い物に行かなくてもいいのであれば、この話はなかったことになるが……」

ここまで説明して、しかし玲は無表情のまま言い放つのだった。

「ご主人様こそいいのですか？　私は不感症ですので。このようなおもちゃに心を奪われるほど放蕩していませんから」

「不感症……？」

「はい。不感症です」

「それじゃあ、あててもいいのか？　その、玲の大切な場所に」

「はい、構いません。ただし、ご期待に添えるような事態にはなら

ないと思いますが。このようなおもちゃを使ったことがないので、ご主人様にお任せします」

「お、おう。そ、それじゃあ……っ」

てっきり嫌がられるかと思っていたのに、あっさりとオッケーをもらってしまって、航太は内心焦っていた。

しかしここで顔に出してはいけない。

将来人の上に立つことになるかもしれないのだ。こういうときに上に立つものが焦ってしまうのは、非常によろしくない。

「そ、それではセッティングさせてもらおうぞ。あてやすいように、そこに立ってくれ」

「はい」

玲はまったく物怖じする様子もなく、航太の前に立ってみせる。

「それでは、まずはスカートをめくり上げて。……ゆっくりと、だ」

「かしこまりました」

玲はメイド服の両端を摘まむと、ゆっくりと持ち上げてみせる。

露わになったのは、黒タイツに覆われた、少女の下着。

玲がつけているショーツは黒タイツ越しであっても白と分かるほどに、汚れを知らぬ純白だった。

「入れる、からな……？」

「入れるのなら早くしてください。それだけ夕飯の時間が遅くなってしまいますから」

「こういうのは慌てずに、ゆっくりとやったほうが風情ってものがあるだろ」

「そういうものですか？」

首をかしげている玲——、その大事な部分を覆っている、黒タイツとショーツのゴムを、ゆっくりと降ろしていく。

このときになって、玲の頬がほんの少しだけ朱に染まった。

なぜなら、そこは——、産毛さえも生えていない、赤ん坊のようなツルツルのおまたがあったのだ。

「玲のここ、綺麗だな」

「……なっ!？」

本心からの何気ない一言。

だけどその一言が、思っていた以上に玲の心には届いたようだった。

「き、綺麗だなんてっ。不感症で、赤ちゃんみたいなのに……っ」

真っ白だったおまたが、見る間に真っ赤になっていく。

むわぁ……。

つるんとしたばいぱんから、立ち昇ってくるのは、ツーンしたおしっこの匂いだった。

目を凝らせば、半脱ぎになっているショーツのクロッチはかなり黄ばんでいる。

未成熟な秘部は、少しでもドキドキすると、愛液を分泌する代わりに軽失禁していたのだろうか？

それは航太には分からないことだったが……、軽失禁していたとしても、玲の大事な部分は十分に魅力的だった。

だけど、あまりにも見つめすぎただろうか。

「そ、そんなに見ないでください……。やっぱり、恥ずかしい」

「わ、悪い。あまりにも可愛かったから、ついつい見入っていた」

「お世辞を言ってもなにも出ないんですから」

「本心だよ」

「むっ〜」

朱が差していた頬は、いつの間にか真っ赤になっていた。

不感症の少女の弱点は「可愛い」らしい。これから機会があったら使わせてもらうことにしよう。

「いまローターをあててあげるから、じっとしてるんだぞー」

「は、はい……」

桃のように鮮やかなピンク色になっているパイパンに、ピンクのローターをあててやる。

玲の大切な部分はやや土手高になっていて、ピンクローターをあててやると易々と飲み込んでみせた。

「……んっ」

「痛くないか？」

「平気、です……。なんか冷たくて変な感じはしますけど」

「すぐに熱くなるさ」

どうやら上手くできているようだ。

こういうことをするのは初めてだから、内心でかなり緊張しているけど。

半脱ぎになっているショーツと黒タイツを上げてやる。

それでもまだ玲はメイド服のスカートをめくり上げたままだった。

「上手くあたっているか？」

「そんなの……知りませんよ」

「ちなみに、ローターという名前から察していると思うが、この手のひらサイズのリモコンを操作すると、いまあてたローターが震えるようになっているから気を抜かないように」

「もう忘れたんですか？ 私は不感症ですから、こんなものでどうにかなるほど変態ではないのですから」

「変態、か。それはこれからわかることさ」

なんでも貫ける矛と、何でも防げる盾。

果たして勝つのはどっちだろうか？

「さて、と。これでご主人様の気が済みましたか？ それでは一緒に買い物に行くという約束を守ってもらいますからね」

「えっ、ちょ、外に出るのか？ その……玲は大丈夫かよ、そんなものをあてて」

「平気です。むしろこれで感じられるようになれば嬉し——いえっ、なんでもありませんっ」

「ま、まあ、約束したんだし、玲が外でも平気だっていうなら構わないか。よし、久しぶりに外に出るぞ！」

「せいぜい腰を抜かさないように気をつけてくださいね」

「ふっ、それはこっちの台詞だぜ」

こうして航太と玲は、町に買い物に繰り出すことになるのだった。

航太のポケットには、早くも熱くなってきたリモコンが握られている——。



(おまた、ちょっと変な感じがするけど、まだまだ平気、かな)

屋敷を出て、噴水の大きな庭を航太と肩を並べて歩いているときのこと。

玲は、ショーツのなかのローターの感触を、歩きながら確かめる。

どうやらローターは、おまたにしっかりと食い込んでいるようだった。

(よし、これなら普通に歩けそう)

玲は、ピンと背筋を伸ばして歩く。

おまたに食い込んでいるローターは暴れ回ると言うことはないようだ。

もっとも――。

女の子はこんなローターなんかよりも大きなナプキンをショーツのなかに入れて生活しなければならないときがあるのだ。

たったこれくらいの違和感で顔をしかめてはいられない。

「本当にメイド服をきたままで家を出てもいいのか？ やめるのなら今のうちだぞ？」

「ご主人様のほうが戸惑ってどうするんですか。こういうとき男の人はどんと構えてもらわないと困ります」

「お、おう」

航太によって屋敷の鉄扉が左右に開かれる。

ここから一步でも外に出れば、玲が着ているメイド服は浮いた存在になることだろう。

それでも玲は臆することなく、外界への一步を踏み出していた。

(大丈夫。これくらい平気です。平気なんだから……)

玲は平静を装うために、心のなかで何度も繰り返す。

大丈夫。

このメイド服はゴスロリファッションいうものだ。

町を歩いていけばたまに見かけるから、大して珍しいものでもない。

平静。

平常心だ。

「そうでご主人様。夕飯のカレーの好みとかはありますか？」

「そうだな……玲が作ってくれるならなんでもいいが……俺は辛口のほうがいいな」

「わかりました」

玲は澄ました顔で応えつつ、しかしチラリと航太の横顔を気にしてしまう。

二人の関係は、他の人から見たらどのように見えるだろうか？

ただの主とメイドの主従関係？

それとも……彼氏の好きな服を着ている、彼女……とか？

そこまで考えてしまい、玲は勢いよく首を横に振っていた。

(そんな……私はただ、航太さんの力になりいたと思って……！)

玲は、頬を赤らめつつも、なぜメイドとして応募したのかを思い返してみることにした。

きっかけは――、

そう。

かなり前のことになる。

あれは新しい学校とクラスに馴染むことができず、玲がクラスで浮いた存在になっていたころのこと。

地味だった自分を変えたいと思って学級委員長に立候補して、それから頑張ってみても、すべてが空回りして上手くいかなかった。

仲のいい友達がいてくれれば、もうちょっと気が楽になっていたかもしれないけど、玲の冷たすぎる容姿は、自然と周囲から人を遠ざけてしまっていた。

そんなときだった。

珍しくテストのときにだけ登校してきた航太が、声をかけてくれたのは。

「もっと肩の力を抜いてさ。せっかくの可愛い顔が台無しだぞ」

初めて声をかけてもらった第一声で、よくもまあ、キザなことを言えるものだと驚いたものだ。

だけど当の航太は、そんなこと気にしている様子もなく、自分の席に着くと突っ伏して眠りはじめてしまっていた。

それからだった。

不思議と肩の力が抜けて、少しずつクラスに馴染めていけるようになったのは。

(この人の――、航太君の力になってあげたい)

いつのころか玲は、純粹にそう考えるようになっていた。

クラスで浮いてた玲だけど、浮き具合でいえば、航太のほうが遙

かに凌駕していた。

なにしろ、テストのときしか登校してこないのだ。

(航太君と一緒に学校に登校できるようになりたい……っ。そのためには、メイド服なんて全然恥ずかしくないんだからっ)

何度も心のなかで念じ、屋敷から歩き続けること10分ほど。

少しずつ路地が太くなっていき、玲と航太の二人は、商店街にやってきていた。

(やだ。周りの人の視線が気になる)

大通りに面した商店街でメイド服を着ている玲は、そこにいるだけでも目立っていた。

それでもここで物怖じするわけにはいかない。

「まずは野菜を買いに八百屋に行きましょう」

「えー、野菜なんてカレーにいらないだろ。肉だけで十分だって」

「好き嫌いしてると大きくなれないですよ」

「いいよ、もう成長期止まってるし」

「なに言ってるんですか。まだまだこれからです。それに前ばかりだと栄養のバランスが崩れます。しっかりと私がメニューを考えますからね」

「……なんか玲は母ちゃんみたいだな。将来いいお嫁さんになれると思うぞ」

「なっ、なにを言ってるんですかっ」

航太にとっては何気ない一言でも、玲にとっては思わぬ破壊力を持っているものだ。

玲はほっぺたが熱くなるのを感じてしまう。

(ここは平常心、平常心……)

心のなかで念じていた、そのときだった。

「!？」

キューンッ！

股間から発せられる微弱振動に、玲はへっぴり腰になっていた。

ミニスカートを穿いているから、ショーツが見えそうになってしまうというのに。

「こ、これは……っ」

「どうした、まだスイッチを入れて、数秒と経っていないぞ。それに最小パワーだ」

「な、なぜこんなときに……っ」

「こんなときだからこそいいんだろう？ スリルは最高のスパイスってやつだ」

「くうっ」

へっぴり腰になっていたお尻をなんとか戻して、背筋を伸ばす。

航太が突如ローターのスイッチを入れたのは、商店街の真ん中を歩いているときのことだった。

当然、周りには夕飯の材料を買いに来ている人たちがたくさん歩いている。

まさかいきなりスイッチを入れてくるだなんて。

(平気、平気なんだから……これくらい……っ)

玲はショーツのなかに爆弾を抱えながら念じる。

それに、玲にはこれくらいは平気だという自信があった。

生まれついでの不感症――。

玲は、自分のことをそう思っていた。

オナニーというものを覚えたのは遅いほうだと思うし、この年になるまで片手で数える程度しかチャレンジしたことがない。

絶頂したことなんて一度も無い……と、思う。

ティーンズ雑誌とかで、気持ちいいこととして紹介されているとたまたま挑戦してみようかなと思ってやってみることはあるけど、いつも残るのは罪悪感だけだった。

(オナニーで気持ちよくなったこともないし。こんなの全然平気なんだから……)

そう思っていたのに。

ヴヴヴヴヴヴヴヴ……。

クレヴァスに食い込んでいるローターは玲の敏感な場所に、ただひたすらに微弱振動を与え続けてきている。

「少しずつ、パワーを上げていくからな」
「こんなの全然、なんともありません」
「その平然とした横顔がいつまで保つかな？」

ローターの振動が、少しずつ、だが確実に強いものになっていく。

それでも玲は気にすることなく八百屋へと辿り着くと買い物を済ませていった。

次は肉だ。

肉は肉屋。スーパーマーケットよりも商店街が発展しているこの地元では、自然歩数が増える傾向にある。

「うっ!？」

玲が低くうめいてしまったのは、肉屋を目指して歩いているときのことだった。じわじわと股間が熱くなってきて、ねっとりとした感覚が染み出してくる。

「ふふ、玲の可愛いあそこがだんだんと熱くなってきたころじゃないか？」

「か、可愛いなんて……っ。赤ちゃんみたいなのに……っ」

「とても魅力的だと思うけどな、俺は」

「あっ、だめ……」

可愛いだなんて言われたら、おまたが熱くほどけてしまう。
それはいままで玲が味わったことのない感覚だった。

なんとか豚肉を買おうと、あとはカレーのルーを買えば今日の夕飯の材料は揃うことになる。

カレールーが売ってるのは……、そうだ、商店街の端のほうにある小さな百貨店だ。

不幸中の幸いか、屋敷への帰り道にあるから、最小限の歩数で済ますことができる。

「ううっ、ちょ……っ、はううっ！」

「危なくなったら言うんだぞ。止めてやるから」

「こ、こんなもの……っ、全然効いてないんですから……っ」

口ではなんとか抵抗するものの、正直なところ玲自身も戸惑うほどの身体の変化が現れていた。

じゅわり……。

(えっ、嘘……。濡れてるの……？ 私、が、おまたを濡らしているの……？)

不感症だと思っていたのに。

それなのに、クロッチの裏側に感じられるのは、生卵のようなヌルリとした感触。

それが止めどなく溢れ出してきて、もしも黒タイツを穿いていなければ内股を滝のように愛液が伝い落ちていたことだろう。

(私がこんなに濡れるなんて)

それは玲自身にも衝撃的なことだった。
不感症だと思っていたのに。
それなのに、こんなにもショーツを熱く濡らしている。

(あなたに可愛いと言われたから……きっと、そう)

じゅわっ、じゅわわ……。

可愛いと言われたことを思い出すたびに、玲の秘筋は熱く濡れそぼっていくようだった。

それでもローターは振動し続けている。

小刻みに。

しかし実際に指で弄ばれているかのように、抑揚をつけて。

それでもなんとか玲は最後のカレールーを買うことに成功していた。

もしかしたら顔が真っ赤になっていたかもしれない。

だけどそれ以上にショーツのなかは熱くなっておもらしをしたかのように濡れそぼっていた。

「はぁ……、はぁ……。これで、全部材料が揃った……。あとは、帰ってお料理する、だけ……うう！」

「そうそう。家に帰るまでが遠足だ。買い物袋は持っててやるから、思う存分に俺の愛撫を味わうがいいぞ」

「はぁうっ」

商店街を出て、路地に入ったときのことだった。

突如ローターが強くなり、玲はついにへっぴり腰になってしまう。

キュッと引いたお尻から、黒タイツに透けたショーツが見えてしまう。

そのショーツは……お尻のほうまで愛液で暗く濡れていた。

「ミニスカートにしてあるから、へっぴり腰になるとぱんつが見えているぞ」

「ううっ、おまたが震えて……んあ」

「不感症なんだろう？ まだまだこれからだというのに感じているのか？」

「こ、これくらい、平気、なんだから……っ」

「そうそう、その意気だぞ」

チリリッ、

股間から静電気のような甘美な微弱電流が放出される。

不感症の玲にもわかる。

クリトリスが剥けてしまっているのだ。

(こんな路地の真ん中で……!? うそ、お豆が、お豆え……!)

なんとか一步進むごとに、クロッチの裏側にこすれている。

商店街から外れた路地だから、人気が無かったのがせめてもの救いだった。

止めどなく溢れ出してくる愛液は、黒タイツを穿いているというのに内股には滝のように愛液が流れ落ちてきていた。

「どうやら弊社のプロトタイプに感じてくれているようで、とても有り難く思うぞ」

「か、感じてなんか……はうう!？」

ぞくぞくぞくっ！

背筋を寒気にも似た感覚が駆け上っていき、反射的に玲は両手で股間を前押さえしそうになっていた。

こみ上げてきたのは、抗いがたい尿意だった。

赤ん坊のようになつるつるのおまたは、まだ自分の意思で濡れることができない。

未成熟な秘部は、快楽を尿意だと誤変換していたのかもしれないなかった。

「あっ、ダメ……」

じゅわっじゅわわっ。

一度尿意を意識してしまうと尿意のスイッチが入ってしまう。

女の子の尿道は太くて短いのだ。

しかも尿道の入り口でローターが痙攣しているのだから、一気に膀胱内の圧力が高まっていく。

「ちょっと……お願い、待ってえ……っ。そ、その……っ」

「どうした、やはり気持ちよくなったと認めたくなくなってきたか？」

「ち、違う……っ。違うの……っ。その、おっ、おし……こ……、したくなってきた……」

「お、おう。そうか」

さすがの航太も突然の尿意の告白にびっくりしたらしい。
だけど手を緩めてくれる気はサラサラないようだ。

「それなら早く帰らないとな」

「そ、そうだけど……っ。おっ、おまたに……あたってるの……止めてえ……っ」

「いい機会じゃないか。それにいまなら玲の可愛い姿を俺が独り占めにできる」

「可愛いなんて……あっ、ああーっ」

ぷしゅっ、しゅわわわわっ。

可愛いと言われるたびに、おまたがほこんでおしっこが漏れ出している。

もう、一刻の猶予も許さないまでに、尿意は水風船のように膨らんでいた。

(我慢……っ。我慢しないと……っ。せめてお屋敷まで……！ この年で、おもらしなんて……！)

なんとか歩を重ねて前へと進もうとするも、
ヴヴヴヴヴヴ……。

股間から発せられる微弱振動は、玲の身体を蕩けさせようとしてくる。

(あっあっ、だめ！ おまたが勝手に……！)

しゅわわ……。

じゅももっ、じゅもももも！

ぱんぱんに膨らんだ膀胱は、少女の貧弱な尿道括約筋だけでは押さえることができない。

ただでさえメイド服という、恥ずかしい服を着ているというのに――、

「んあ！」

ぎゅううう！

玲は、両手で股間を前押さえしていた。

それは少女がプライドを捨てて、尿意に屈してしまったあまりにも屈辱的なポーズ。

「はあう!？」

しかしその瞬間、玲は腰をキュッと更に後ろに引いてしまう。

股間に食い込んでいたローターが、前押さえをしたことによって更に深いところへと潜り込んできたのだ。

「そうか。もっと振動が欲しいのか」

「ち、違うっ」

「遠慮することはないぞ。このローターには、新しい機能がついているんだ。その名も、ソニックモード」

「なっ、なんか……名前だけで不穏なものを感じるんですけど！」

「説明しよう。ソニックモードとは、俺が電動歯ブラシを使っているときに閃いたものなんだ。とにかく細かい振動をするのが特徴だぞ！」

「細かい振動って！ あっ、いまは、ダメ……！」

「スイッチ、オン！」

「あ——！」

ソニックモードがオンになった瞬間、いままでとは比べものにならないほどの微弱振動が股間に襲いかかる。

「——！ ——！ ——！」

玲は、もはや言葉を発することができなくなっていた。

せめて——、

せめて、近くの路地裏に。

もう屋敷に帰ることなど、玲の頭から吹き飛んでいる。

いまにもおしっこが吹きが噴き出してきて、すべてが大決壊してしまいそうだった。

(せめて、あの路地裏に行かないと……っ)

じゅもも……。

じゅもももも……っ。

しっこが漏れ出してきている。

もう前押さえしているスカートは、おしっこでビタビタになっていた。

それでもなんとか、よろめきながらも前に進み、影になっている細い路地へと駆け込むと――、

玲は、その瞬間に決壊した。

「はあああああああああああ……！」

ぷっしゃあああああああああ！

とても立っていられずに、あひる座りで腰を抜かすと、スカートに隠れている股間からはくぐもった水音が、勢いよく弾ける。

「んっあっああっえっ」

しゅわわわわわわわわわわわわわ！

恥辱の音色とともに、玲を中心として大きな水たまりが広がっていく。

それだけ玲はおしっこを溜め込んでいたということだ。

(うそよ。こんなにおしっこが溜まってたなんて……っ)

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！

いつもなら水洗トイレで放つおしっこの量なんて意識したことなんて無いけど、こうしておもらししてみると改めて実感させられる。

膀胱に溜まっているおしっこの、なんと大量なことだろうか。

実際には一リットルにも満たない量であっても、少女を恥辱の泥沼へと沈めていくには十分だった。

「あっ！ あっ！ あああ!？」

ぷしゅっ、ぷしゅう！

発散されたのは、尿意だけではなかった。

キュン！ キュン！ きゅうううう！

視界が真っ白にスパークすると、突如下半身から高圧電流が解放されて、全身を駆け抜けていく。

「あええ……!？ ……かっ、カハッ！」

全身の筋肉が痙攣し、あひる座りのままでガクガクと腰が痙攣し、子宮が熱く蕩けたとでもいうのだろうか？

ショーツのなかが熱くなって、キュウキュウと痙攣する。

(こ、これが、絶頂、なの!?)

ぷっしゃあああああああああああ！

だしとたら、生まれて初めての絶頂。
自分の身体が、こんなにおかしくなるだなんて。
それは不感症の少女には、刺激的すぎる痙攣だった。

「あっ、あぐっ、ぐうう！」

にゅるるるるるるるるる！
ビチ！ ビチチ！ にゅるるるる！

初めての絶頂に――しかし、玲の身体は耐えきることができな
かった。

大腸までも激しく蠢動すると、緩みきった肛門から溢れ出してた
のは、不浄の物体。

「えっ、あっ、う、う……うそ……いやっ、やああ！」

ぶり！ ぶりぶりぶり！
ぷっしゅううううううううう！

おまたが痙攣するたびに、ショーツへと柔らかく熱い流動体が放
たれていく。

あっという間にお尻を覆い尽くすと、それでも容赦なく肛門から
はマグマが噴火してくる。



「うっ、んんんん！ い、やあ！ 勝手に……！ 勝手に漏れ……！ いやあああああああああ！」

ぶりぶりぶりぶりぶり！

びち！ びちちちち！ にゅるるるる！

もしも黒タイツを穿いていなかったら、ショーツから不浄が溢れ出してきていたことだろう。

事実、ショーツでは包み込めなくなった茶色いものが、ショーツから溢れ出して、黒タイツによってせき止められている。

ニユルリとした茶色い軟便が、黒タイツを伝って内股を覆い尽くそうとしていた。

だがその様子は、スカートに隠されていたから見えなかったことが、せめてもの救いだ。

「なっ、なんっでえ……！」

「どうやら快樂のあまりに大きい方までおもらししてしまったようだな。こんなに感じてくれて嬉しいぞ」

「んあっ！ い、いやぁ……！」

「気にするなって。気持ちよすぎると粗相をしてしまう女性はいらしいから」

「でもお……っ、ぱっ、ぱんつがあ……！ あっつくなって……あああううー！」

おぼぼぼぼぼぼ！

ぶりゅ！ ビチビチビチィ！

可憐なメイド服のスカートに隠されているショーツから、なんとも言えない茶色い腐敗臭が漂い出す。

ショーツで荒れ狂っている茶色いマグマは、少女のクレヴァスへと食い込んでくると、小陰唇もクリトリスも蹂躪していく。

ビチ！　ビチチ！

プシャア！　プッシャア！

クリトリスをマグマによって蹂躪された玲は、絶頂するたびに漏らし、漏らすたびに絶頂する。

そんな玲を中心として、黄金の湖が広がっていくと、玲を感応の奥底へと引きずり込もうとしていった――。

☆

「はぁ……、はぁ……、はぁぁ……っ」

にゅるるるるる……。

ビチ、ビチビチビチ……。

しゅわわわわわわわわわ……。

だんだんと痙攣が弱まってくると、緩みきった下半身の穴から漏れ続けてきているものも、少しずつ弱まってきてくれる。

この路地裏に入って、どれくらいの時間が経ったのかはわからない。

恐らく、10分にも満たない時間だっただろう。

だけど玲からは時間の感覚がすっかりと抜け落ちていた。
初めての絶頂――。
しかも、人に見られながらの。
それにローターで。
おしっこも、うんちも垂れ流して。

「うう……うっ！」

ブボボ！ モワァ……。

最後に気泡の混じった軟便を漏らすと、玲の失便はやっとのことで終わってくれた。

ローターは、いつの間にか止まっていた。

たぶんだけど、玲が路地裏に辿り着く前に止まっていたのだろう。

ということは、路地裏に入ってから絶頂は、すべて玲の若さ故の賜物ということになる。

「はぁ……ううっ、すっきり、してしまい、ました……」

「全部出たか？」

「そんな恥ずかしいこと、聞かないでくださいよ……」

口では言いながらも、小さくうなづく。

「ううっ、もうぱんつがぱんぱんになってます……っ」

ショーツのなかに満たされた軟便は、お尻にベッタリと貼り付き、そしてクレヴァスの深いところにまで食い込もうとしてきていた。

航太にあててもらったローターなのに……汚してしまった。

「全部出たならよかった。ほら、立てるか？」

「うう……むりい……っ」

「手を貸してやるから」

「あううっ」

航太に手を引かれて立ち上がると、

ブリブリブリッ！

しゅいieiieiieiieiieiiei……。

体内に残っていた排泄物が漏れ出してきて、ショーツを更に盛り上がらせてしまう。

メイド服はミニスカートになっているから、盛り上がった輪郭がチラチラと見えてしまっていた。

「誰か人が来たら、俺の陰に隠れるんだぞ」

「……うん」

「手、繋いだままでも大丈夫か？」

「お願い……このまま……繋いだままで、いさせてください」

「わかった」

航太の手をギュッと握ると、航太も軽く握り返してくれる。
その手が思っていたよりもゴツゴツとした男の子をしていて……
玲の鼓動は人知れずに高鳴っていた。

☆

その日の夜。

「ご、ご主人様……。カレーができました」

「お、おう」

航太の目の前……大きな食卓に並んだのは綺麗に盛り付けられた
カレーライスと、ツナサラダ。

悠花が丹精こめて作ってくれた逸品だった。

しかし玲と航太の表情とどこか引き攣っている。

それも無理ないことだろう。

ほんの一時間ほど前に、玲のおもらししてしまったショーツと黒
タイツを二人で洗ったのだから。

「んん？ どうしたの、二人とも早く食べないと、カレーが冷めち
ゃうよ？」

なにも知らない悠花だけがぼくぼくとカレーを食べている。

意を決して航太もカレーを一口だけ食べてみる。

一拍遅れて、玲も。

「うん、う、美味しい、ゾ」

「あら、意外と……美味しくできて、る……？」

冷や汗を垂らしながらカレーを食べる二人に、

「うん！ とっても美味しいね！ 玲ちゃんを買ってきてくれたカレーの材料のおかげだね！」

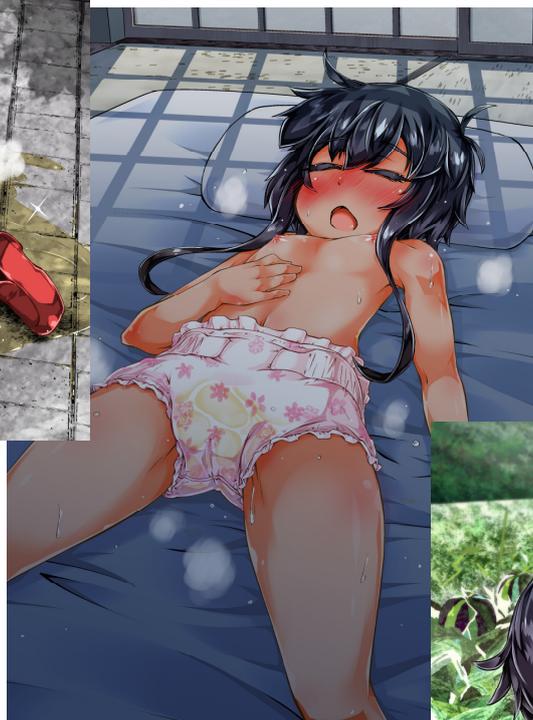
素直に美味しそうに食べている悠花を尻目に、航太と玲はどこか達観したかのようにカレーを口へと運んでいくのだった。

体験版はここまでです！

ここまで読んでくれて、ありがとうございました！

§ 既刊紹介 §

ロリと過ごす一夏の田舎ライフ！
大決壊！～田舎の元気娘と！～



ダウンロードサイトで配信中！



それは突然『牙』を剥いた！

女子7人に襲いかかる集団食中毒！



ダウンロードサイトで配信中！

